

テーマ「労働問題」

～ひとりで頑張りがすぎていませんか？～

パート	内容
オープニング	7775 件 これは、ある NPO へ 2012 年に寄せられた、労働相談件数です。 私たちを取り巻く労働環境において、どんな事が起こりうるのでしょうか。
ストーリー	<p>製造会社で勤務する前原大輔です。入社して 10 年が経ちました。</p> <p>既に時刻は 23 時を過ぎていますが、この日もまだ仕事の終わりが見えず、土日や祝日に出社命令が出ることも珍しくありません。3 年前に主任に昇進しましたが、管理職のために残業代は一切支払われることはないのです。このような過剰労働の日々が、ここ数年ずっと続いています。</p> <p>明らかに違法なサービス残業とは分かっているにもかかわらず、上司からのパワーハラスメントが激しくなることを危惧し、ただ黙っている他ありませんでした。</p> <p>また、思いつめて提出した辞表も「この忙しい時期になんてこと言い出すんだ。」と拒絶を受け取ってもらえず、それまでと変わらない過酷な日々は続いていきました。身も心も疲れ果て、これ以上はもう自分が潰れてしまうと思い、ネットでみつけた労働相談センターという NPO に、思い切って相談することにしました。相談員の方はとても親身な対応で、今まで誰にも相談できなかった職場環境での悩みを聞いてもらい、少しずつ精神的な負担が軽くなっていくようでした。さらに、一人では泣き寝入りしてしまいがちな問題に向けて具体的なアドバイスに勇気をもらい、これまでの職場環境の記録や非合法な労働の証拠を揃えて、地域労働組合への加入に踏み切ろうと思うようになりました。</p>
社会の現状の説明	この前原大輔さんのように、職場でのパワーハラスメントや過剰なサービス残業などに加え、有給休暇を取得できない、退職が難しいなどといった問題は、以前から社会問題として大きく取り上げられてきました。しかし、依然として数多くの労働者が苦しんでいるのです。このような様々な労働問題に苦しむ方々を支援する活動を行なっているのが、NPO 法人労働相談センターです。
課題に取り組む NPO の紹介	NPO 法人労働相談センターの矢部です。労働相談センターでは、労働問題に悩んでいる人からの電話相談に加え、メールと面談での相談に無料で応じています。専従スタッフ 6 名に加え、弁護士、医師、社労士、行政書士、産業カウンセラーを含む 332 名のボランティアスタッフと共に活動しています。2012 年の相談件数は 7775 件であり、4 年前から増加傾向にあります。相談内容は最近では賃金にまつわる問題が増加しており、次いでセクハラを含むいじ

	<p>め関連、解雇・会社都合の退職、いじめ・嫌がらせ、サービス残業、労働時間となっています。</p> <p>私たちは、誰にも話せなかった悩みを親身に聞くと同時に、解決へのヒントを一緒に見出し、少しでも背中を押せばという一心で活動しています。現役で働いていらっしゃる方には、一人で抱え込まず、問題が大きくなる前に、ぜひ相談してほしいです。悩みはなかなか打ち明けにくいことがあるかと思いますが、抱えていると次第に重くなっていきます。ですが、相談することが心の支えになって、希望を持つことができたという人が、沢山いらっしゃいます。そうして希望が持てたら、行動に移すことができるかもしれません。私たちは、「組織対個人」という労働問題の構造に立ち向かうには、労働者の数が集まるしかないため、解決策の1つとして組合に加入する、組合をつくる、などの重要性を説いています。また、相談者の皆様の状況に合わせて、しっかりと記録を残しておく・専門機関に相談しに行くなど、それぞれに適したアドバイスをしています。労働環境にお困りの方の問題が大きくなる前に摘み取り、背中を押すために、このような相談の場があることを認知していただきたいです。</p>
<p>プロジェクトに参加したプロボノワーカーの声</p>	<p>労働相談センターのプロボノプロジェクトに携わったプロボノワーカーです。労働問題について、プロジェクトに参加する前は存在は知っているものの、少し距離が遠い問題でした。不当解雇や賃金未払、パワハラ等、言葉では「あー！そういう問題はあるだろうな」とは知っていましたが、自分自身や知人はIT企業や大手会社での勤務が多く「労働問題」で切実に悩んでいるという人間が身近にいなかったため、問題に対する実感値は薄かったです。</p> <p>ただ、実際に労働相談センターでの活動内容と実績を知り、また相談者へのインタビューを通じて生の声を聞いたことから、労働組合、賃金ストライキというイメージに代表されるような運動、組織活動だけではなく、働く人間にとって具体的な問題であるというリアリティーを徐々に持つようになりました。また同時期にたまたま友人が退職勧告をされるという経験があり、その情報共有や相談を受ける中で、まさにこの労働問題なのだと思える出来事もありました。</p> <p>実際に労働相談センターの代表や矢部さんにお会いして想いを聞き、活動を24年間継続されてきたということに驚きと感動を覚えました。プロボノを通じて、労働相談センターが強い情熱・熱意を継続して、地道にまじめに活動を続けて実績とビジョンを創ってきた団体なんだということが伝わりました。実際プロジェクト上で新しいWEBの提案をした場合も「ビジョン、判断する価値観、活動」が明確な為、すぐに回答を頂き、スムーズにプロジェクトが進行していきました。「改めて今回のプロボノを通じて、本気で活動をしている人とコラボレーションさせていただいたことに加え、労働問題という分野について学び、自分事として関心を持つチャンスを得ることができました。」</p>

2013.2.2 プロボノシエーター2013

NPO の 今後のチ ャレンジ	<p>日本は不妊治療大国と言われています。数年前は 10 組に 1 組でしたが、今や 6 組に 1 組が、治療や検査を受けています。このように、日々、身近な問題となっていく「不妊」の問題。特に不妊治療には、精神的・身体的・時間的な負担がのしかかるため、佐藤きよ子さんのように、仕事と両立できずに、やめざるを得なくなる人も多くいます。</p> <p>Fine が 2010 年に行ったアンケートでは、仕事と治療の両立が難しく、退職や休職をした人が 40%にものぼりました。企業の中には、高島屋さんやキャノンさんのように「不妊治療休暇」という取り組みを始めてくださっているところもありますが、まだごく少数で、残念ながら、大きな広がりを見せていません。不妊治療のために退職が増えることは、30 代・40 代の、大事な戦力を失うことにもつながりますので、企業にとっても損失であるという声も多きかれます。さらに、不妊当事者にとっては、いくつもの大きな負担がのしかかっています。</p> <p>中でも深刻なのは金銭的な負担です。Fine の調査では、約半数の 47.4%の方が、不妊治療費の総額が 100 万円を超えると回答しているのです。多くの治療費がかかってしまう不妊治療の中に、「体外受精」という方法があります。これは妻の卵子を体外に取り出し、夫の精子と受精させ、妻の子宮に受精卵を戻す方法です。一見とても特別なことに思えるかもしれない治療方法なのですが、実はすでに、体外受精によって誕生した子どもは、日本だけでも 2010 年で 27 万人を越え、その年の新生児の約 37 人に 1 人まで広がってきています。つまり、学校の 1 クラスの中に 1 人は、「体外受精」で生まれた子どもがいる計算になります。（体外受精だけではなく「人工授精」を入れると、もっともっと多くの子どもが「不妊治療」により、生まれてきています）この体外受精の成功率は決して高くないのですが、金額は、成功する、しないに関わらず、1 回で約 50 万円かかります。少子化が進み、この治療を行なう人の数が年々増えていることから、現在では国から助成金を出していただけるようになりました。しかしその条件がやや厳しく、せつかくの助成金を使える人は限られています。</p> <p>不妊対策は、日本の少子化対策のひとつであるとも言えると思います。そこで Fine では、この助成金の条件を緩和していただけるよう、5 年前から署名を集め国会請願を行なっています。このほか、性教育の改善なども求め、今後も積極的に国政への働きかけを行なう予定です。</p>
最後のま とめ	<p>労働にまつわる問題は、誰にでも起こりうることです。そしてそういった労働環境の悩みを相談出来ずにずっと 1 人で抱え込んできた結果、自ら命を断つことを考えてしまうことも、起こりうるといえます。そういったつらい気持ちを抱えている方へ、寄り添いあうように、耳を傾けて聞く「国際ビフレンダーズ東京自殺防止センター」という NPO もあります。東京自殺防止センターでは、死にたいという相談電話が一晩中鳴りやむことはなく、その数一晩でおおよそ 150 件にもなるそうですが、現在のボランティア数で受け付けることができるのは毎晩 30 から 40 件です。相談の内容は様々ですが、精神疾患を抱えながら働くなかで困難を感じてい</p>

る方も相当数いらっしゃるのが現状であると言います。

この問題は、1人で抱え込まず、家族や同僚、友達以外にも、労働相談センターや自殺防止センターのNPOの方々など、心の声を打ち明けることのできる人を見つけることが、希望をもつ第一歩となります。特に、男性は相談することで自分の弱さを認めてしまうことになるために、相談することに躊躇してしまう方が多いのが事実ですが、一歩踏み出して労働相談センターへ相談してみることで、このような声が届いています。

「今まで絶望感でいっぱいだったのですがメールを拝読して希望が持てました。

丁寧にご教示もして頂けて、相談して良かったです。」

「メールを読みながら涙がこぼれました。職場に組合があるので相談したほうがいいと思いましたし、場合によっては、ご紹介いただいた労働関係の窓口やユニオンに相談するかもしれません。」

「私も自信はなかったのですが、今回のお返事で、次の話し合いでは自信を持って交渉できそうです。」

仕事はつらくて当たり前、という考えで悩み続けている人がたくさんいます。しかし、悩みに親身に耳を傾け、どう解決していくかの糸口を与えてくれるNPOがあります。そういったNPOの活動を知り、改めて社会を見渡してみると、見え方が変わってくるかもしれません。

※冒頭部に出てくるストーリーは、事実に基づいたフィクションです。イベント当日に読み上げていただいた方とは、全く関係はありません。